人との関わりを通して自分の心が見えてくる

●築地本願寺常例布教

今月（2025年9月）4日、木曜日から、7日、日曜日までの間、築地本願寺常例布教に出講しました。お朝事（あさじ）、午前、午後、夜と四回の法話があります。初めて聞く人を考慮して専門用語を使わずに仏さまのお話をするように前もって指示がありました。

今回は、親鸞聖人の言葉を聞き書きした『歎異抄（たんにしょう）』をもとに、各回、まとまった内容のお話をしました。

二年ぶりに、常例布教のご縁を頂きましたが、色々、変わったこともありました。

前回は、境内、北側の建物の一角、多目的ホールで常例布教が開催されていました。部屋の側面がすべて、ガラス張りで、お聴聞にお参りになられた方には、「とても開放的」で、法話をする側にも、あまり落ち着きのある環境とはいえない場所でした。

しかし今回は、築地本願寺の本館一階の聞法ホール（旧、総会所）でのおとりつぎでした。聞法ホールは、以前、総会所（そうがいしょ）と呼ばれていた畳敷きの大広間で、今では下足のまま入ることができるように改装されていますが、お内仏のお荘厳（しょうごん）は以前のまま、本願寺派の伝統的な様式でご本尊が安置されています。

その聞法ホールは、常に入り口扉が開放されていて、文字通り、通りすがりで初めて入ってこられる方も随分増えたと関係者から聞きました。なお、尋朝（じんじょう）は、朝7時から本堂で勤められます。

静寂の中、6時半に、雲板の合図があり、7時ちょうどに、行事鐘の喚鐘（かんしょう）が響くのは、今では、ネット環境が調（ととの）えばオンラインの配信で世界のどこにいても、手元のデバイスで開くことができますが、その場の空気感に参加するという体験は、さらに奥深い何かを感じさせるように思います（当日、お参りされた方からも同じ感想をいただきました）。

『正信偈（しょうしんげ）』、そして、六首引和讃（ろくしゅびきわさん）に続いて、法話を始めると予想を超えて百名近い人びとが築地本願寺本堂にお集まりでした。

●夢を見ました

常例布教から帰宅し、丁度、一週間が経ちました。

夢［「夢」を文字強調］を見たことを意識することは多いのですが、その日の夢［「夢」を文字強調］は、輪郭を明瞭に覚えているものでした。

人々の前で、『歎異抄』の講義をすることになりました。
しかし、それは釋徹宗先生の話のようであり、また、私自身が話をしているようでもありました。
『歎異抄』の内容を四つか、五つくらいの項目に分けて話をしました。
その法話の中で、私は集まった人々に、「好き嫌いを言っている自分がいませんか?」と尋ねています。

「憎い人などひとりもいない。
憎いと思う私がいるだけ。」（直枉会カレンダー）

という言葉がありますね。
そこからふと思いついたのです。
時として、自分がこんな老人（高齢者）になってしまったと自分を（否定的に拒絶して）考えることがあります。
先の言葉をもとに、よくよく見つめてみるならば、この世の中に憎い年齢などは（固定的に決まって）無いのだと受け止める世界も生まれます。
それを嫌がっている自分がいるだけなんだ。
※そのような私を超えるモノサシをいただくのが「アミダさまの眼差しをいただく」という生き方であり、日々、念仏を生活習慣として生きるところに恵まれる利益ではないか、という趣旨を伝えているようだった。

●夢を通して自分を見つめる

夢自身を妙にハッキリと覚えているものでしたから、書きとめました。（内容は微妙に異なるものです）

実は、このひと月くらい、河合隼雄先生の書籍を読んだり、YouTubeでその講演や講義を繰り返し視聴しています。

河合先生は、ユングの心理学を学び、夢を深く分析することを通して、人間が「生きる」という問題を考え、そして、生きた方です。
（私は、河合隼雄という風邪をひいたと思っていますが、この言葉遣（づか）いの背景には才市（さいち）さんの口あいを意識しています。※妙好人と呼ばれた浅原才市（1850～1937）さんの口あいという宗教的心情を歌った詩には、風邪をひいて咳が出るように自分は「ご法義の風邪をひいた」と語り、ご本願に出遇えた喜びを、お念仏が声になって出てくれることを「念仏の咳がでるでる」と歌われたそうです。）

さて私はいま、ユング心理学と真宗の教えをいずれも、一人ひとりが自分の人生の中で、まことの自己実現を目指す道と捉えながら学んでいます。

夢は、日常の社会的･世俗的な意識（自我、あるいは対社会的仮面（ペルソナ））が休んで、より深い自分の思い（それを河合隼雄先生は本当の自己、魂と教えてくれている）が働き、気づかなかった自分の深い意識と向き合うことになると先人は学んできました。

実際、河合隼雄先生は、「だから、場合によっては、容易に自分の夢など語ると意識していない自分を知られることになることもある」と言われているくらいです。

私は、今年六十八歳になります、歳相応に老い、また、病み、複数の医院にも定期診断に通い、健康維持のためとサプリメント（健康食品）など服用しています。（※これはまるで、不老長生という呪術、おまじないを求める心とどこかで重なるようだと自己分析をしています。）

改めて夢の中で、人に向かって加齢を意識して話をしているのは、実は自分の意識の反映なのかと自己診断をしたりします。しかし、それは私ひとりで自分を見つめるようになれたのではないようにも思えます。色々な人との関わりの中で、その時々の周囲の出来事が、私の心を深く見つめさせるようになったということは間違いないと思えるようになってきました。

当たり前ですが同級生も皆、私と同じ歳です。久しぶりに出遇うと、「お前、ずいぶん歳取ったな」と言い合いますが、相手から見れば自分も同じなのでしょう。自分では気づかない自分の姿を深いところを旧友の姿からも多くのことを教えて貰っているような気もします。

万行寺の月例の法話会は、しばらく休座です。季節行事は、予定通りに開いています。今月9月27日は、大來尚順先生を迎えて彼岸会です。お参りください。オンライン法座の申込みは、この万行寺のHPから、メールでお申し込みくださいますようにお願いいたします。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。